

礼拝さいこう

礼拝の「双方向性」の形を新たに求めて

教会音楽室長 江原美歌子

コロナ危機の中、オンラインによる礼拝が定着してきていますが、その中で礼拝の中の会衆間の「双方向性」に課題があることが指摘されています。Zoomでは「双方向」をある程度経験することができますが、話すのは一人に限定され、「平和の挨拶」など隣の人との交わりは難しく、ましてやYouTube による礼拝になりますと、隣の人との双方向によるつながりは断念しなければなりません。

教会に集う中で、これまでたくさんの「双方向」を経験していたことを振り返ります。一方向性になりがちになっている礼拝であっても、愛さんや、午後に行われる各会や委員会などで、様々な双方向の関わりをもって、礼拝で大切にされる双方向性を補っていたとも言えるのではないのでしょうか。

教会音楽室では、隔月の「教会音楽カフェ」や、3か月毎の「『新生讃美歌ブックレット』を用いた研修会」を通して、各地の教会の皆様と語り合う機会が以前とは比較にならないほど増えていることは、大きな恵みです。このところ語り合いの度に話題に上げられる「賛美歌のことば」についても、カフェや研修会を重ねる度に、気づき合いが積み重ねられており、視野・視点が広がられています。

今号では、礼拝から起こされている平和のできごと、礼拝、教会音楽の双方向の語り合いから導かれたトピックや証し、研修レポート等をご紹介します。ここから又新たに双方向の対話が起こされていくことを願っています。

Index

- 1) 寄稿「ウクライナ難民と共に歩むポーランド教会」友納靖史（常盤台）
- 2) 「前・現教会音楽専門委員」による座談会
宇都宮毅（仙台）、小松澤恵（常盤台）、藤井秀一（花小金井）、森洋子（函館美原）
- 3) 「第4回新生讃美歌ブックレットを用いた研修会」座談会報告 アンケート
- 4) 「歌詞の意味を理解して」賛美歌検討委員会議 藤井秀一
- 5) 「第11回教会音楽カフェ」テーマ「こんなことやってます！」から
桑原百合子（八代）、飯田みか（百合丘）
- 6) 「音楽を用いて神と人ともに仕える」平野義愛（常盤台）
- 7) 「アメリカ・カナダ賛美歌学会大会レポート」菊地るみ子（大井）
- 8) 『新生讃美歌』329「全能の神はいかぢも」賛美歌解説 小松澤恵

「ウクライナ難民と共に歩むポーランド教会」

常盤台バプテスト教会 友納靖史

「主はわたしの岩、砦、逃れ場。

わたしの神、大岩、避けどころ。…

主をわたしは呼び求め、敵から救われる。」

(詩編18編3-4節)

この御言葉は、ロシア侵攻が始まってポーランドの首都・ワルシャワ第一バプテスト教会で守られているウクライナ語礼拝で最も愛読されたものです。これを教えてくださったウクライナ語会衆のマイケル・バロア牧師は、この教会で多岐に渡る難民支援を担い、ご自身もロシアのクリミア侵攻(2014年)により難民としてワルシャワへ逃れた方でもあります。現在、このワルシャワ第一バプテスト教会(以下WBC)では毎主日、ポーランド語の他、中国・ベトナム・ロシア・ウクライナ語で礼拝が守られており、それを支えるのがこの教会のマレク・ブジンスキ主任牧師です。サバティカル休暇を頂いたこの7月、5つの教会を訪問した中、ワルシャワ教会の礼拝事情を中心に分かち合わせて頂きます。

この教会との個人的な出会いは1985年、共産主義体制下のポーランド(以下「波蘭」と表記)を訪れたのが最初で、2016年春には連盟内6教会の方々と「平和といのちに出会う旅」で再訪。その後も継続した交わりが続いていました。WBC伝道開始は1875年に遡り、現会堂は、ナチス時代、ユダヤ人を高い壁で囲み強制隔離した二つの「ゲッター」を結んだ橋の袂に位置し、今も多くの観光客が訪れる場所にあります。ユダヤ人を自宅に匿ったことでアウシュビッツ収容所へ家族共に送られ、生還された教

会員や、危険を冒しユダヤ人に食料(パン)を秘密裏に届ける働きを教会が担うなど、「平和を実現する」使命を負った歴史があります。その教会がこの2月末、ウクライナ国境から押し寄せる難民を支援する働きをバプテスト組合(約110教会)と共に開始したことを知り、常盤台でも募金活動が始まりました。それを聞きつけた連盟諸教会と幼稚園、女性連合や西南学院中高なども協力を申し出て下さり、7月末までに500万円を超える支援金をWBCへ届ける支援の輪が広がったのです(※支援活動報告書希望の方はご連絡ください)。5カ月間、この教会だけで二万人を超える難民への支援が行われたことから、波蘭国内の全教会が担った支援奉仕の大変さはどれ程であったかと驚かされます。戦争の長期化と物価燃料高騰、インフレも重なり、波蘭国民も苦悩し、一般支援活動の殆どは7月で打ち切られる中、WBCでは心のケアと衣食支援活動が世界のバプテストからの支援により継続され、今も実に多くの難民が集まっています。

主日朝10時よりポーランド語礼拝が守られ、Amazing Graceなど514曲の伝統的賛美を収めた



ワルシャワ教会正面壁「あなたたちは真実と平和を愛さねばならない」(ゼカリヤ8:19)が刻まれている

バプテスト編纂の賛美歌集「Głos Wiary (信仰の声)」が用いられています。また新しい世代への伝道を願い、1992年よりワーシップや現代的賛美を取り入れた曲集「Wędrowiec (寄留者)」(ネットで常時最新版が入手可)が取り入れられました。波蘭教会での奏楽・伴奏は全国的にピアノかキーボードで、エレキギター、管楽器、弦楽器等を用い、伝統的賛美と新しい賛美を併用する「ブレンディッド礼拝形式」が近年主流となっています。コロナ前までWBCは20名程の聖歌隊賛美が奉仕していましたが、7月末の時点で元には戻っていませんでした。

それに比べ、日曜午後2時から守られるウクライナ語礼拝では、合唱もバンド奉仕者数も多く、特に若い世代の活躍が目立ちました。その理由の一つは、戦火を逃れ、家族を残し祖国を離れた人々にとって、礼拝に集い、共に母国語で賛美し、御言葉を読み、祈ることは実に大きな慰めと励みだからです。礼拝堂(300人収容)に入りきれず、会堂外に設置されたモニターを通し礼拝する人々もいる程でした。

冒頭で紹介した御言葉の他、ロシア侵攻後最も賛美される曲をマイケル牧師に尋ねると、「Oceans・Where my feet may fail」(Hillsong Ukraine)と言われ、訪問した日の礼拝でも歌われていました。歌詞は、湖上を歩かれるイエスに呼ばれたペトロが、水面に足を置くと、恐怖の余り足が沈みだす…。その姿と今抱える自らの不安と恐れを重ね賛美されます。「あなたの名前を呼び、波の上から目をあなたから離しません。私の魂はあなたに抱かれ、休息を得ます。私はあなたのもの。あなたは私のもの」。切なる魂の叫びと



ウクライナ語礼拝の様子：講壇左手に賛美伴奏チーム、中央に賛美リード、右手に聖歌隊、衆席左手では手話賛美を用い、礼拝を奉げている

賛美が世代を超えて奉げられる礼拝に、心震えました。

最も忘れられない光景がありました。ウクライナ語礼拝の直前に守られていたロシア語の礼拝とは僅かな入れ替わり時間しかありませんが、教会内の楽器、音響設備などを共有し、互いに助け合いつつ、礼拝を守り、交わりがなされている様子です。国同士は戦火の中にありながら、同じキリスト者として交流し、時には合同で礼拝する関係性を見て、「『神の国』が、ここにある」と。この春以来、難民支援活動をポーランド各地の教会が始めたことで、ウクライナ語礼拝も開始され、同時にポーランド人新来者が教会に集められているとの証を各地でお聞きしました。様々な違いを越え共に礼拝を守る場に、主が力強く働いておられることに触れ、励ましと希望を注がれ、帰国の途に就きました。



「礼拝さいこう」座談会 第2弾！

座談会メンバー

小松澤 恵（常盤台バプテスト教会） 宇都宮 毅（日本バプテスト仙台基督教会）
藤井 秀一（花小金井キリスト教会） 森 洋子（函館美原キリスト教会）

今回の座談会では、前・現教会音楽専門委員の皆様にお集まりいただき、この10年を振り返っていただきました。同窓会のような雰囲気ですと和やかに語り合いがはじまっていきました。

森 それまで教会音楽推進に問題意識がなかったが、2014年の総会に参加することを通して課題を意識することができ、改革について共に考え、総会に立ち会うことができた。

宇都宮 所属連合内の札幌教会で全国礼拝音楽研修会があって釧路教会から参加、2009年から委員となった。それまでの専門委員会会議は、教会音楽専門家の集まりという印象だったが、実際は「礼拝そのもの」が話し合いの中心であったので関わってよかった。

藤井 教会音楽専門委員会会議に約10年、現在は賛美歌検討委員として関わっている。

小松澤 2014年度から関わり8年になる。地方連合教会音楽担当者協議会では東京地方連合で参加した。

宣教課題に呼応してきた 教会音楽専門委員会会議と 礼拝音楽研修会

藤井 2011年以降は、専門委員に牧師が増えたという印象がある。

宇都宮 最初は会議では今のように歌詞について話さなかったが、テーマ決めの時など「ことば」にこだわるところはあった。

小松澤 浦和教会で開催された第1回目全国礼拝音楽研修会に出席した。テーマは「礼拝と音楽」で、音楽に重きをおいて、分科会はオルガン、指揮、聖歌隊、ピアノ基本で、実技が多く、音楽奉仕者が参加する研修会という印象だった。それまでの研修会の名称は「教会音楽」研修会だったが、『新生讃美歌』が「礼拝」で用いられる賛美歌集となったことで「礼拝」と「礼拝で用いられる賛美」を学ぶことを念頭においた「礼拝音楽研修会」となったという。

宇都宮 「和解のつとめにつかえる」が2011年～中長期骨子となり、「礼拝は和解のことがら」であることを再認識した。



小松澤 恵
常盤台バプテスト教会
教会音楽専門委員 2014年～現在
座談会司会

藤井 中長期計画初年度の2011年に起こった東日本大震災はターニングポイントであったと思う。「どのような賛美ができるのか？」の考え方が2011年前後で変わった。

「ことば」のこだわりが始まったのはそのあたりではないか。

小松澤 年齢や仕事、育ってきた環境などいろいろな違いをもった者同士が、一緒に礼拝することの意味、「誰と」共なる礼拝なのか、礼拝は和解が起こる場、がテーマとなっていた。

宇都宮 「和解」のテーマでは、私たちの中には様々な「へだて」があることを確認した。

藤井 東日本大震災の経験を通して、教会は何のためにあるのかが、あらためて問われたように思う。またその頃奉仕していた酒田伝道所の活動は「礼拝」のみであったが、それゆえに「礼拝の喜び、いのち」を求め続けていた。そのような思いを抱きつつ専門委員会議に参加していた時、『ミニストリー』（キリスト教新聞社）の季刊誌の中で「さいこう」ということばが目にとまり、「礼拝を再発見する」意図で「礼拝さいこう」という言葉を提案した。それは礼拝の「再考」「再興」「最高」という意味が込められていた。

小松澤 それまでのニュースレターのタイトルは“NEWSONG”だったが、その後から「礼拝さいこう」になった。

森 まさにコロナ危機の状況にあって「礼拝だけは守ろう」ということが教会の中で共通してあるので、震災での経験は今に通じることではないか。

宇都宮 霊、息をあわせることで「和解」が起きられる。コロナでは「歌うな」といわれ、戸惑っている。仙台では感染者が増えているので、奏楽のみで心の中で歌うことにしているが、その賛美の形では何か足りないと感じる。

森 函館美原は徐々に戻し、今は通常通り賛美歌を歌っている。小さな群れなので、感染が気になる人はオンラインで参加している。音楽は空気中の振動の業であって、説教もことばを交わすことも同様で、現在、その空気の振動を感じるができないことは残念。「対面」では単に顔をあわせることだけでなく、目に見えていないことを様々に経験しているのではないか。

宇都宮 奏楽は会衆賛美に仕えているのであり、会衆の息と奏楽者の息は空気でもシンクロ（同調）している。今、ズームで話しているのは電気振動であり疑似体験。連盟事務所で会議をこれまでやっていたが、それは同じ場でシンクロしながらやっていて、夜遅くまで話したことが朝ひらめいたりしたこともあった。ズーム会議では意思疎通の難しいところがあ

宇都宮毅

日本バプテスト仙台基督教会
教会音楽専門委員
2009年～2022年5月



「礼拝さいこう」 座談会

る。今は話し合いのプロセスに限界があるのではないか。

小松澤 中長期の前後から、テーマのことば、分科会の設定も変わった。2010年の天城山荘での礼拝音楽研修会では、音楽担当者ではない方々に参加を呼びかけた。

宇都宮 礼拝奉仕者は牧師と奏楽者だけでなく、会衆の存在がある。その気づきは、バプテストだからだと思う。

小松澤 コロナの礼拝では、会衆は奉仕者といえるのか？ オンラインだと観客になってしまっているのではないか。

藤井 奏楽者や牧師だけでなく、礼拝をみんなで作っていくプロセスを意識したのは第8回全国礼拝音楽研修会からもそうだった。みんなで関わっていくことを大切に考え、分科会が設定された。2011年以降は、伴奏者不在の教会の声を受けながら、地域教会の現状に即して、研修会でも配慮していった。大きな研修会のお祭りのなよさもあるが、方向性としては現場によりそう必要性が語られ、研修会にも表されてきた。

小松澤 それまで「地方」で開催していても「全国」としていたが、第13回の研修会からは「全国」の看板をはずすという転換があった。それまでもそれぞれの地域の現場に即してという思いは持ってきたが、タイトルにおいても表されたのがこの回からだった。

宇都宮 連合の状況にも聞き、寄り添うことが大事になっていった。地方連合音楽連絡協議会では、「声をあげてよいのですね。」と声をいただいて嬉しかった。これからは連合によって濃淡ができてしまい、又どこに声をあげてよいかを不安に感じている方々も多い。

藤井 教会音楽ネットワークを作ったのもその影響。音楽委員会はそれまで他の委員会等とあまりつながっていなかったと思う。そのことに気づいてから、他の部門とつながりを持つように努めていった。

森 13回の研修会が地域密着型になったのは大きなことだった。対象となった函館美原、苫小牧教会はパートナーシップ協定を結んで、牧師が説教を交換しているが、13回の研修会からも励まされ、出かけていくことが実際にできたことは大きかった。連合ではそれまで奏楽者派遣はしていたが、単発でしかできなかった。旭川と函館地区での研修会はモデルケースとなり、パートナーシップの形をイメージすることができた。

小松澤 旭川東光教会では「何もしないでください」「礼拝を見てください」という要望で、画期的だった。そこから研修会の作り方がかわり、和解のつとめのテーマ設定が変わった。もう少しこれが続けられたらよかった。

2014年の改革と今機構改革

宇都宮 2014年の総会提案では、宣教部が縦割りになっているのを変えたいという目的があったが、提案を諸教会に共有するプロセスに課題があった。



森洋子
函館美原キリスト教会
教会音楽専門委員
2015年～2018年度

藤井 これまで「教会音楽」室だったが、当時「礼拝音楽」室への名称変更の可能性について考えていた時であり、この部署がなくなることは、「礼拝」を考えつづける部門がなくなることでであると危惧していた。今回の機構改革も同様の懸念があり、「礼拝」についてどこで語り合い深めていくのが課題ではないか。改革の中で諸教会の「礼拝」の活性化について語られていないように思う。

宇都宮 2014年では「教会音楽」のそれまでの推進に対してのマイナス評価を受けたが、当時の教会音楽専門委員会議では「礼拝」推進に主眼を置いていたので、その評価は実際の推進と乖離があった。「礼拝推進は大事、この部署を無くしてはいけない」と有志が集まり話し合い、議場に臨んだ。

藤井 議場内外で声をあげなければ、諸教会には問題が認識されなかつただろう。新バプテスト誌もセットの提案だったこともあり、どこが課題点なのか、諸教会が把握することは難しかったと思う。

小松澤 今機構改革では、「教会音楽カフェ」で、「これ連」の委員に参加を促し対話に努めてきたが、諸教会には改革がまだ十分に理解されていない。今改革で、礼拝を考える部署がなくなる懸念だけでなく、「音楽」推進に関する要望も多く、看板がなくなることの影響はないのか等、問題が共有されてきた。

森 前改革の総会提案では、議場から戻ってからも、食事をしながら、お風呂に入りながら、対話をしながら、改革について話し合った。その後、教会音楽専門委員になって自分事になった。「教会音楽室は『音

楽』をやっている」と理解されてきたが、礼拝は自分にとって何か？を、ひとりひとりの信徒に問うことに努めてきた。

宇都宮 教会音楽室は「音楽」の部署という理解は今でも続いているが、大切にしていきたい。「礼拝」推進は実は一人ひとりのことがらであり、これからも「礼拝」を問いかけていく部署は必要。「礼拝」は一定ではなく変わっていくもので、聖書の言葉も変わり、賛美の言葉も変わっていく。総会議場では「礼拝」の本質を問う問題提起まではいかなかった。

小松澤 礼拝中での会衆賛美は外せない。その賛美（歌）について、問い合わせる場所がなくなる不安も感じていたのではないか。「教会音楽カフェ」でもいろいろな背景のメンバーが毎回集まっていて、結束力は今も続いている。「第4回新生讃美歌ブックレット研修会」でも賛美歌のことばを考える部門がなくなるのは困るとの力強い声が挙げられた。それが反映されることを望んでいる。

宇都宮 東日本大震災の時も、歌える賛美歌がないという声があったが、宣教の内実に応える賛美歌を考え、歴史的にグリップする部署は必要である。

藤井 教会音楽主催の大きな集会、お祭りの要素への批判もあって、「地域密着」という推進の形にシフトした。教会音楽推進に関して誤解を与えてきたことは、説明が不十分だったとの反省がある。礼拝が大切だ



藤井秀一
花小金井キリスト教会
教会音楽専門委員
2009年～2019年度

と伝えきれていなかったのではないか。

「新生讃美歌ブックレット研修会」では賛美歌検討委員会議からの発信が少ないと指摘された。プレゼンテーション、情報発信がさらに求められている。みんなの意識を変えていくには時間がかかる。

森 外国籍の方々との共なる賛美という視点もある。函館美原では2016年～19年、フィリピンからの技能実習生が多数礼拝に出席されていた。賛美は日本語と英語歌詞を投影していたが、実習生がタガログ語に訳しただけで3カ国語で歌うことが出来るようになった。外国籍の方々と共に礼拝することによって私たち自身もとても豊かにされていることを実感した。

小松澤 2019年には宣教部5室の専門委員会議で全体会議をした。教会音楽室では、礼拝が原点であることに立って、ネットワークづくりをし、諸教会の声に聴き、寄り添うことに務めてきたことを分かち合った。「新生讃美歌アンケート」では特別委員会に問いかけて応答があり、今年度の「新生讃美歌ブックレット研修会」では発題者として参加してくださった。以前は、様々な委員会との対話はなかったが、今は少しずつではあるがつながることができてきている。地方連合連絡協議会なども行い、連合とつながり、「礼拝さいこう」ニューレターなども諸教会とつながってきた。

宇都宮 諸教会・伝道所の共通ワードは「礼拝」、その「つながり」を手放してはならない。宣教部専門委員会議合同協議会で、国外伝道専門委員会議の委員から「ミシオデイ」の宣教理解について発言があった。「私たちが福音を届けるのではなく、神が

この世に出かけてくださっている」との宣教理解から推進が変わっていったという。

その宣教理解と現状の推進の課題について、初めて宣教部合同会議で共有できた。

藤井 「新生讃美歌ブックレット研修会」では、歌詞がこんなに大切だとはじめて知った方が多かった。「賛美歌のことばは変えてはいけないのでは？」という固定概念がまだある。これまで発信してきたつもりだったが、この「新生讃美歌ブックレット研修会」を開催したことで、それがやっと理解された。まずは地道に始めていくしかない。『新生讃美歌』が発行されて20年かかってここまで来た、5年10年かかって賛美歌が変わり、礼拝が変わって、礼拝が活性化するのであり、この推進はやり続けなければならない。情報過多で、伝わらないこともあるが、時間をかけて、歩むプロセスが必要。賛美歌を固定化してはいけない。LGBTQと賛美歌のことばの問題など、今後どう考えていけばよいのか？など、投げかける部署は必要。

宇都宮 連盟のパラダイムシフトというテーマでは「賛美歌」の観点で考えられなかった。そのことは、コロナ後これからどうするか課題とつながっている。連盟の施作と「礼拝」を直接つなげる必要があった。前回の改革では、お金がないから『新生讃美歌』を塩漬けにするという言葉も交わされていた。賛美歌は塩漬けにしたら死んでしまう。新しい賛美歌を作りだし歌っていかないと礼拝が死んでしまう。

藤井 賛美歌検討は礼拝の検討の中心であり、残して行ってほしい。礼拝は変化し続け、ブラッシュアップし続ける必要がある。賛美歌がいまだもってなぜ変わらないのか？

小松澤 改訂するにしても声がわきおこってくる
ことが必要。そのためには検証が必要。

宇都宮 ことばの問題性がどれだけの傷を与える
のか。賛美歌には何を歌っているのかわから
ないというものもある。意味を問わずに歌う
ことで加害者になっていくこともある。書面
総会となると議論がわきあがっていかない
し、オンラインでも限界がある。アナログ的
なものは大事。

藤井 賛美歌検討委員会議では中間報告を出し
ているが、読み解かれて、諸教会が意識し
て賛美歌を選曲するまでいたっていない。
膨大な情報で浸透していないのでまずは情
報発信をこまめに伝えていく必要がある。
改訂するのは先のことだろう。教会音楽カ
フェなどコミュニティーで火をつけるのは
どうか。教会で賛美歌のことばの検討をし
ている方々に課題を広めてもらってはどうか。
賛美歌検討委員会議では、地域でチ
ームを作って評価することをはじめたが、そ
の報告や情報共有をしていない。広げる取
り組みはしてきたが、発信に至っていない。
「教会音楽カフェ」で『新生讃美歌』
曲評価を試みるのはどうか？

小松澤 つながる場、コミュニティーの場を作る
のは大切。関心をもっている輪の中で議論が
充実する。「新生讃美歌ブックレット研修
会」で「無自覚ということばを無自覚に使わ

ないで」「すべての人にここちよい言葉があ
るのか？」の発言があった。「答え」を示す
のではなく、考えていくきっかけを作ってい
くことが大事で、その場を提供していき
たい。賛美歌のことばで課題になっている「命
ささげる」についても、語り合うことが大
事で、白黒つけることが目的ではなく、賛美
歌のことばを自らの信仰告白のことばとして
いくことがゴール。発信し続けていかなけれ
ば、生まれにくい。

宇都宮 賛美歌には怖さがある一方で、一緒の方
向に向かわせる面もある。神学的な統一見解
を出さないのが『新生讃美歌』だった。対話
を続ける限り『新生讃美歌』は続くだろう。

森 連合で研修センターの委員を担っている
が、賛美歌のことばの検証など、提案して
いきたいし、多くの方に「教会音楽カ
フェ」を経験していただきたい。オンライ
ンでは本音をいえないし時間外でコミュニ
ケーションができない。一人で参加すると
理解しないまま時間が過ぎていき、そのま
まになってしまうなど、課題が多々ある。
コロナを経験して連合の協力伝道の形も変
えていく必要を感じている。結論を出して
いくのではなくても、みんな話していく
ことの大切さを感じる。

協力伝道中、「礼拝さいこう」の対話がこれからも続
けられていくことを期待して座談会を終了しました。



「第4回 新生讃美歌ブックレットを用いた研修会」 座談会

座談会メンバー：日韓・在日連帯特別委員会：松坂克世(静岡)

靖国神社問題特別委員会：藤田直彦(恵泉)

2022年9月3日(土) 13:00~15:00 [Zoom] 参加人数:47名 司会: 江原美歌子教会音楽室長

「第3回新生讃美歌ブックレットを用いた研修会」では、性差別問題、部落問題、ホームレス支援特別委員会の委員の皆様に参加いただき、座談会を実施しましたが、第2弾として今回は、日韓・在日連帯特別委員会から松坂克世さん(静岡)、靖国神社問題特別委員会から藤田直彦さん(恵泉)にご参加いただき、座談会を開催しました。いくつか交換された発言をご紹介します。

藤田：日韓合同授業研究会の中で、加害・被害の歴史について考えるようになった。韓国側は被害者としての歴史をどのように継承するかに重点を置くが、加害者である側は、隠された事実を明らかにすることと同時に、なぜこのようなことになったのかということに目が向く。バプテスト連盟の歴史においても、私たちがなぜどのように戦争に加担したのかを考えるために連盟前史が重要になる。

靖国神社問題と連動して、恵泉教会では、賛美歌の言葉に関して、連盟とも質問や応答を重ねてきており、賛美歌の「命ささげる」の言葉に関しても検討して教会独自の取り組みがある。2018年には定期総会で「『新生讃美歌』に関する私たちの決意表明」を提案した。否決されたが、その後、連盟でそれがどう受け止められてきたかを注視している。ウクライナでの戦争があって、両国が戦争を肯定することを子供たちに教える中で、「命を捧げる」を、今どう歌っていくのかは課題である。

松坂：加害者、被害者からみる歴史があり、どこに立って歴史を見、どこに立って歌うのが、今問われているのではないかと。

変わり続ける教会へとして「更新を刻む」ことがあるだろう。新しい歌を歌うということは、単に、新曲を歌うということだけではなく、自分自身が新しくされること。歴史認識も更新される中

で、私がどう歌うのか?が問われる。そこには「変わり続ける教会」という視点がある。2003年に発刊された『新生讃美歌』だが、20年近く使用して、ようやく手垢がついて、気がついてきたことがある。賛美歌のことばを考えるとということは、ひとつ前進といえるのではないかと。「新生讃美歌アンケート」でも回答しているが、賛美歌は果たして、会衆の告白、教會的、私たちの宣教のことばになっているか?を問い続け、変わり続けていきたい。

藤田：歌は生きている。歌は作った人のもの、歌った人のもの、聞いた人のものとなる。名前を隠している在日コリアンや自分の性について明らかにできない人の存在など、その存在を意識し、想像力を働かせて考えたい。賛美歌の言葉の検証は、日本バプテスト連盟の課題であり、続けなければならない。

松坂：礼拝に新しい方々が来ると、新しい風が通っている。その方と捧げる礼拝はやはり新しい礼拝のはず。

藤田：「首相官邸前ゴスペルを歌う会」でシーズンを問わずクリスマスの歌や、様々な賛美歌を歌うが、いつも歌っている賛美歌が、首相官邸前で歌うと、普段とは違って響く。賛美歌を読み直すということでは、どこで誰と歌うのが大事になっていく。



「新生讃美歌ブックレットを用いた研修会」 感想から

研修後のアンケートで参加者から寄せられた「感想」の一部をご紹介します。

●言葉は、それぞれの人の人生経験によって受け取り方が違う事を感じ、難しいなあと思いました。が、歴史的な背景のある言葉や差別的な言葉については、しっかり認識していきたいと思います。

●賛美歌の歌詞、言葉の深い意味、ふさわしい表現など、様々な見地から考える必要を感じさせられました。どうしても歌詞よりメロディーが優先されてしまっていたように痛感しています。このようなことを関心のある教会員と話し合う機会を作るのもいいのでは…と思いました。

●時代に合った、救いの喜びや希望を持てる言葉を探すことも必要だと感じた。

●「どこで、だれと歌うのか」それぞれの、そしてさまざまな痛みを抱えているわたしたち。想像していくことの大切さと、想像の限界も考えさせられます。だからこそ、この企画のように学び続

け、考え続けていく大切さを思いました。

●「主に献げる」という歌詞への見解には釈然としないものが残りました。なお、讃美歌を歌うときに、歌詞をあまり考えてこなかったという人が案外多いのだと、今日、初めて気づきました。私の教会ではどうなのだろう……音楽委員として考えさせられます。

●特別委員会に対するアンケートを、「出した。受けとった。」で、終わって、賛美歌検討委員会が、どのように検討してきたのかという、応答がないから、このような事（各委員会で賛美歌に関して継続して課題として取り上げている特別委員会は無いようだ）になるのだと思いました。

●様々な意見や考え方を伺えて視野が広がる思いがしました。また熱い語らいの中で感じた皆様の信仰に大変励ましと力を頂きました。

賛美歌検討委員会による『新生讃美歌』曲評価101番～200番の

「中間報告Ⅱ」をご覧くださいでしょうか。読みこなせないなど声をいただいております。今後、中間報告を読む会など計画してまいります。すでにお読みいただいた方から、2つのご指摘がありましたので、以下、訂正をお願いいたします。

3ページ、118番に関する記述。

作詞者モンゴメリーの父親は、確かにスコットランド（またはイギリス）のモラヴィア兄弟団の牧師ではありましたが、彼の作品をドイツの賛美歌のカテゴリーに入れることには無理がある。

→英国賛美歌のカテゴリーへ

4ページ、194番に関する記述。

「ゲルハルトの詞に、バッハが100年以上後に曲をつけた」

→『新生讃美歌』にも「作詞は1653年、作曲は1736年」とある通り、

“100年以上後”ではなく厳密には83年後となります。

「ことばの課題」では、沢山の例を紹介しています。現在、カフェやブックレット研修会で語られている「賛美歌のことば」を学びあっていく上の資料としてどうぞご参考ください。



「第4回新生讃美歌ブックレットを用いた研修会」を受けて

「歌詞の意味を理解して」

賛美歌検討委員会議 藤井秀一（花小金井キリスト教会）

賛美歌検討委員会議では、特に『新生讃美歌』の「歌詞」について一曲々々検討を続けてきました。最近委員会議で話題になっているのは、いくつかの賛美歌の歌詞にある「命をささげます」「すべて献げます」という表現に対する以下のような問いかけです。たとえば戦時中「国のためにいのちを捨てる」ことが奨励された時代、「命をささげます」と歌う賛美歌はどのような思いで歌われたのか？ また昨今、家庭崩壊を引き起こすほどの多額の献金を奨励する、宗教団体の問題性がクローズアップされるなか「全て捧げます」という歌が、礼拝において歌われることを、新来者はどのように感じるか？ というような問いです。

この問いに対しては、「そのような歌詞の賛美歌は歌わない」という解決方法もあるでしょう。しかし早急な決断をする前に、まずこの賛美歌の歌詞が生まれた背景である、聖書の記述、特にパウロが「自分を神に捧げる」ことを信徒に勧めている意図について、確認する必要があります。

「こういうわけで、兄妹たち、神の憐れみによってあなた方に勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なるいけにえとして献げなさい」

（ローマ12:1）

たとえばこのローマ12章の箇所において、パウロは自分の体を神に喜ばれる聖なるいけにえとして献げなさいと告げます。しかしその前提は、11章までパウロが語ってきた、神からいただいた恵みと憐れみにあるわけです。その神の恵みと憐れみに応えて、わたしたちは、自分の

体を主に献げて生きようとパウロは勧めています。もちろんこの場合の、「自分の体を神に喜ばれる聖なるいけにえとして献げる」という表現は比喻であり、本当に体を犠牲にするという意味でないことは言うまでもありません。この後2節では「世に倣わず」「何が善いことで、神に喜ばれ」ることかをわきまえるようにと続くように、「自分の体を捧げる」とは、神から与えられている体を用いて神に喜ばれるように生きる生き方であり、その方向性について語られていることは明らかです。

同じ事をパウロは、ローマ6章13節以下で、こう告げています。「あなたがたの五体を不義のための道具として罪に任せてはなりません。かえって、自分自身を死者の中から生き返った者として、神に捧げ、また、五体を義のための道具として神に捧げなさい」また6章19節には「かつて自分の五体を汚れと不法の奴隷として、不法の中に生きていたように、今これを義の奴隷として献げて、聖なる生活を送りなさい」とあります。

要するに、キリストに出会うまでは、罪の奴隷として自分中心の生き方に縛られていた。しかし今やキリストにおいて注がれた、神の愛と恵みのゆえに、神中心に生きていける、新しい命をいただいて、罪の奴隷から解放していただいた。ゆえに、共に神に喜ばれる生き方を、神に捧げていきいこう。これがパウロの語る

「自分の体を神に捧げる」という言葉の意味と理解します。

その意味において、賛美歌の歌詞に「主にすべてを献げます」「このいのち主に献げます」あることは、罪の奴隷から解放され、主に従って生きる自由と喜びを知ったキリスト者が、自己中心ではなく神さま中心に生きていきたいという願いと祈りを込めて、「献身」の賛美として歌ったのだと思います。

しかし、このみじかい歌詞の中に込められていた、本来の「意味」や「神学」が忘れられ、表面的な「命捧げます」「すべて捧げます」という言葉だけを切り取り、それが独り歩きし、「神」ではなく「国」や「宗教組織」のために「すべてを捧げよ」と誤用されるとしたら、それは憂うべき事です。

いずれにしるこの問題は、「そういう歌詞の歌は歌わない」とか「歌詞を変える」という解

決の仕方の前に、むしろ本質に立ち返り、キリスト者にとって「自分を神に捧げる」という表現は、どのような意味で言われてきたのか「歌詞に込められていた意味」を確認し、理解したうえで歌うことが、まず大切なことと思います。

そのうえで、教会の信仰とその文化を知らない方々にとって、誤解しやすい言葉があれば、別の言い方を探す工夫も必要でしょう。「福音」を誤解なく、妨げなく、届けるために。

毎週の礼拝において歌われている賛美歌の歌詞を、そのような視点でじっくりと眺めてみませんか。

新生讃美歌ブックレットを用いた研修会 これからの予定

第5回 新生讃美歌ブックレットを用いた研修会

11月1日（火）19：00～21：00 新しい歌を歌おう！

『新生讃美歌ブックレット』の第4章「新しい歌を歌おう！」から、1. 聖書の言葉を賛美歌にする、2. 賛美歌創作、3. プレイズ&ワーシップソング4. 新しい賛美歌 ～ヒム・エクスプロージョンを取り上げます。この他、新しい曲も紹介していきます。

第6回 新生讃美歌ブックレットを用いた研修会

2023年2月4日（土）13：00～15：00 アメリカ・カナダ賛美歌学会100周年大会報告

7月に開催されたアメリカ・カナダ賛美歌学会100周年記念大会では、『新生讃美歌』の編纂とこれまで気づかされてきたことを中心に、江原美歌子室長が分科会で研究発表をしました。『新生讃美歌』の歴史を振り返りつつ、今課題として見えてきたことを踏まえ、これからを展望していく内容です。ご一緒に「これから」の私たちの賛美について考えていきませんか？

(各回ごとに事前申し込みが必要です。詳細は、教会音楽室までお問合せください。)

「第11回教会音楽カフェ」 テーマ「こんなことやってます」 から

八代バプテスト伝道所 桑原百合子

南九州地方連合大牟田熊本ブロックでは、二か月に一度、リードオルガン研修会が行われています。コロナウイルス感染拡大が極めて深刻な時期には、数回休会しましたが、慎重な予防対策のもと、今年は、順調に会がもたれています。その歴史は、2014年、南九州地方連合音楽研修会に参加した有明キリスト教会の奏楽者たちが、教会音楽室の次年度の方針が、奏楽を重視することと知り、念願としてきた、年に3,4回のリードオルガンでの初歩的、基本的研修を音楽室に依頼し、音楽室からは、講師として青野詔子先生を紹介されたことにより、2015年、始まりました。

研修会では、オルガンの踏み方が毎回の注意事項です。前奏曲と『新生讃美歌』の指導を、一人一人受ける時は、前奏曲では、楽譜通り弾くこともですが、曲のテーマの現われ方を知り、曲全体を理解すること、曲にふさわしいストップを選ぶことも大切であると、また、賛美

歌については、難しく弾きにくい箇所では、音符を省くことによって落ち着いた伴奏、のびのびとした会衆讃美になると学んでいます。豊かな指導を受けてもなかなか習得できず悩みますが、悩むことは目指すことにつながり、喜びと出会います。ある時、取り組んできた曲が新しく生まれ変わってきたと感ずることがあり、とてもうれしくなりました。研修会では、賛美歌についても知識が広げられ、神様を賛美することに、ますます招かれています。そして、良き捧げものができるようにと奏楽奉仕者を助けてくださる青野先生に、一同、沢山の感謝です。



百合丘キリスト教会 飯田みか

初めて参加した教会音楽カフェ。東北から九州までの教会の「こんなことやってます」を聞いたのは新鮮で感謝でした。その際に、私が話した百合丘の取り組みをご紹介します。

コロナパンデミックで、音楽に関わるすべても縮小していた2020年5月。音楽委員会として「兄弟姉妹の気持ちと繋がる何か」を発信したいと願い、「月報」で〈私の愛唱讃美歌〉という1ページの新連載を始めました。

1回2人。「愛唱讃美歌（讃美歌なら何でも）から1曲を選んで、それにまつわるエピソードや証を500字まで」と依頼し、これまでに約50人が寄稿しています。すでに召された方との思い出、救われた時のこと、幼い頃によく歌ったもの、人生の節々で励まされた曲……、「これを書いて、教会と繋がっていることを思い出した」という方もいました。

毎回、それぞれの思いが込められた証に、多

くの教会員が感動をおぼえています。私もリアルで会えなくなった兄弟姉妹に思いを馳せ、胸が熱くなり、頭の中でその讃美歌が流れ出すことがしばしばですが、若い人の挙げた新しい曲に「知らない！知りたい！」と思うことも。素晴らしい証ばかりなので、「冊子にまとめた」という声上がるほどです。



献身の思いが与えられて

音楽を用いて神と人に仕える

この度はこのような証の機会をいただいたことを感謝いたします。献身についての証と現在の活動、特に賛美歌専門YouTubeチャンネル『Joshua Worship and Service』について、証させていただきます。

現在、東京藝術大学音楽学部にて作曲を専攻しており、大学入学と同時に、高校時代の同期と共に『連弾野郎』という連弾（1台のピアノを二人で弾く演奏スタイル）ユニットを結成し、コンサートやライブなどの企画・主催、イベントなどでの演奏、CDアルバムの作成など、とても充実した活動をしていましたが、2020年1月に、神さまによって献身の決意が与えられ、「自分のための音楽でなく、神さまのために音楽をする」という思いが与えられました。それがきっかけとなり、『連弾野郎』は解散を決定。ちょうどその頃に、新型コロナウイルスが蔓延し始めました。

コロナ危機となり、教会からは人が消え、毎週の礼拝を捧げることさえ難しくなりました。その中で、神さまが今何を自分にしよう働きかけておられるのか、祈っていたとき、教会のある方から、「賛美歌の伴奏音源を配信してほしい」という声をいただきました。これは神さまから与えられた御計画ではないかと思い、その年のイースターから賛美歌の伴奏やアレンジをYouTubeにアップし始めました。「直接、教会で賛美ができない中、配信を通して自宅でも賛美ができるようになって心が慰められた」というお声をいただいたり、教会の礼拝の中でその音源を用いて賛美を捧げてくださったり、時には海外

常盤台バプテスト教会 平野義愛

の方から礼拝の中で用いさせてほしいというお声をいただくこともありました。どのような状況にあっても、神さまは生きて働いておられるのだということを実感いたしました。

「あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。」（ペトロの手紙 I 4:10）

クリスチャンには、神さまから与えられた賜物を用いて互いに“仕え合う”ことが使命として与えられています。そしてそれは「すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して、神が栄光をお受けになるため」です。

私の今の願いは、多くのクリスチャンにこのチャンネルを知っていただき、奏楽奉仕者のおられない教会や、自宅でも賛美がしたい方に用いていただきたいということです。もし、お近くにそのような方々がおられましたら、ぜひこのチャンネルのことをお知らせください！そして、それによって多くの方たちの霊が燃やされ、神さまの光が日本中に光り輝きますように、祈り願っています。

YouTubeチャンネル『Joshua Worship and Service』サイトの情報はコチラから！

<https://www.youtube.com/channel/>



アメリカ・カナダ賛美歌学会大会レポート

「神さまは素晴らしい」「賛美歌は素晴らしい」「人間は素晴らしい」

大井バプテスト教会 菊地るみ子

今年の7月17日～21日、私はワシントンD.C.のカトリック大学で開催された、アメリカ・カナダ賛美歌学会100周年大会に出席する機会をいただきました。日本賛美歌学会員の江原美歌子さんのお誘いを受け、江原都代子さんと、その他四名の学会員の方々に同行させていただき分科会で伴奏協力をしました。ここに大会の中の一部ですが報告いたします。

大会は多様な宗派、国、セクシャリティー、言語を持つ人々約三百名が集いました。毎日さまざまな礼拝形式で賛美歌（英語以外もあり）を歌い、コロナ危機の中、私たち教会、世界の課題を共に考え、礼拝、賛美歌を研究し、福音をどのように分かち合うのか、深く考え、励まされる大会でした。マスク着用でしたが、久しぶりに「会衆賛美」の醍醐味を味わうことができました。

テーマはSing the world God Imagines「神が想い描かれる世界を歌え」。プログラムの表紙にはドイツ語、中国語、スペイン語、日本語、ポルトガル語、英語でテーマが書かれていました。

午前中は賛美タイム、礼拝、基調講演。昼食後は自由に選べる分科会（9コマ並列）が一時間半毎に組まれていました。日本賛美歌学会担当の分科会「Imagining Japanese Hymns in the World God Imagines」（写真右）では、学会がこのために編纂した32曲収録の賛美歌集「Let a Tiny Stone Shout Out」（叫べ、小さな石）を紹介し、集まった方々と共に歌いました。日本社会に横たわる課題、キリスト者、

私たち教会が向き合うべき課題を聖書に聴き、歌詞に現し、創作賛美歌や、「荒城の月」のメロディーに歌詞をつけたものなど、



また、バプテストからは8曲収録され、すべて、英訳または、スペイン語訳がつけられました。私は伴奏をしながら、人々の表情を伺っていましたが、戦争、原爆、命、神の愛の歌詞をみな真剣に歌っていました。日本の伝統的な旋律や日本の賛美歌に初めて触れた方々が大半のようで、終わった後で私のところにも「伴奏はどのように弾いていますか。」「この歌は日本ではどのような時に歌うのですか。」など質問がありました。

この分科会の後には、江原美歌子さんのプレゼンテーション「The Spirit of Awakening in Japanese Baptist Hymns and Worship」が持たれました。米国南部バプテスト連盟の賛美歌が感謝と共に日本バプテスト連盟諸教会で歌われ、賛美歌集に収録されてきた歴史と賛美歌で見てきた問題点や、日本特有の「歌詞」の課題（天皇制用語、神道用語、不快語、差

別語など)をととてもクリアに説明をされ、そして今、改善へのプロセスを歩んでいることを紹介された講演は素晴らしかったです。(いずれ、内容が公開されることを望んでいます。)



その他、前アメリカ・カナダ賛美歌学会会長で賛美歌学者カール・ダウ Dr. Carl P. Daw, Jr.による詩編歌集“Praise, Lament, and Prayer A Psalter for Singing”では、150篇ある詩編を、既存の曲に「歌詞」を付した「詩編歌」を紹介され、大変感動したと共に「詩編を歌う」ことの大切さを教えられました。また、各地から集まった音楽家たちによる様々なコンサートが地域の教

会で行われ、楽しく豊かな経験でした。

音楽には趣味、好き嫌いがあります。賛美歌の歌詞、曲の共有が難しい時もあります。時に自分の好みを抑えてでも受容する努力が必要で、自分の思い通りにならないことを乗り越えることが大切だと思います。テーマにある「神の思い描かれる世界」を祈り求め、生きづらさを感じている友に「あなたは愛されている」と伝えること。現実の中で聖書をどう生きるのか問われ続け、変わらないものを残し大切にしながら、変化を受け入れ、多様を認める。コロナ危機のダメージを「神の思い描かれる」ように回復したい、と祈られます。

その上で「これからの賛美歌」の歌詞に私たちの課題を反映させ、教派を超えて賛美歌を分かち合い、日本の教会が祈り励まし合う恵みをいただけたらと願わずにはおられません。

大会最終日の**クロージング・ヒム・フェスティバル**が、ナショナル・シティー・クリスチャン・チャーチで開催されました。大会前に、世界の賛美歌のキリエ、グローリア、ハレルヤ、ベネディクションをテーマにした賛美歌募集のお知らせがコーディネーターのPamela Ruiten-Feenstra氏からあり、日本の賛美歌として、大谷レニー先生の「ベネディクション」を推挙したところ採り上げられ、会衆賛美で歌われました。(英語訳はシンガポール日本語教会 提供)

動画でプログラムを視聴できます。開始から1時間30分のところで歌われます。

YouTube動画 [Thursday Annual Conference Festival - YouTube](#) QRコードはこちら→

プログラム [Thursday Festival - Digital for Sched.pdf \(dropbox.com\)](#)



左ページで紹介された歌集**“Let a tiny stone shout out”(叫べ 小さな石)**を購入ご希望の方は、ehara@bapren.jp までご連絡ください。11月19日(土)には、日本賛美歌学会第21回大会が日本基督教団吉祥寺教会で開催され、アメリカ・カナダ賛美歌学会大会報告や歌集の紹介をする予定です。日本バプテスト連盟の『新生讃美歌』からは「主は豊かであったのに」、「たとえばわたしが」、「ユースソングブックⅡ』からは「私たちは神の作品」「つちくれの歌は」「かみさまの世界」、「少年少女ひろば」メッセージソング「あなたと」他が収録されました。

新生讚美歌 329 全能の神はいかずちも

God the Omnipotent! King, who ordainest

小松澤 恵

この賛美歌では「平和をあたえませ」という祈りの言葉が毎節の最後に歌われます。世界の各地で争いがあり心を痛める日々の中、思いと声を合わせ、共に賛美したい賛美歌のひとつです。

1833年に作られたこの曲は、ロシア皇帝ニコライ2世は、ロシアには他の国の国歌に匹敵する真の国民的起源の国歌がないことを憂えて、サンクトペテルブルクの皇室礼拝堂の音楽監督であり、ヴァイオリニストだったアレクシス・フォードロヴィッチ・リボフ（1798-1870）にその作曲を依頼したことによります。リボフが作った曲に、宮廷詩人のジュコフスキーにより『*Бо́же, Царя́ храни́!*』（神よ、皇帝を守り給え！）という歌詞がつけられ1833年11月23日に初演されました。

世界平和への雄弁な嘆願の詞は、英国が世界中でいくつかの紛争に巻き込まれた世紀の半ば、1842年にビクトリア朝時代のイギリス文学界で作家兼ジャーナリストとして有名でクエーカー教徒であったヘンリー・フォザーギル・チョーリー（1808-1872）によって書かれ、「戦争の時」という見出しの下で出版されました。当時、英国の工業化による生産力の増大により、圧倒的な経済力と軍事力で世界の覇権を握っていましたが、争いも多く起きていたのです。

そしてその約30年後、普仏戦争の前夜にジョン・エラートンもチョーリーの詞を模倣しながら、賛美歌の詞を書きました。エラートン（1826-1893）は、40年間教区で奉仕した英国国教会の聖職者でしたが、賛美歌作家（約50の賛美歌を書いた）、賛美歌学者、賛美歌編集者でもありました。当時イギリス人は、ドイツとフランスの間の紛争に引き込まれることを恐れていましたので、エラートンは彼らに神の主権の力を思い起させ、安心させるために書いたともいわれています。

その後、この2人の作者による2つの賛美歌の合計8節の詞が、賛美歌編集者によって4節にまとめられました。神が『全能であり、恵み深き愛の方であり、義なる神』であることを高らかに宣言し、広く歌われるようになっていきます。（3、4節の歌詞はエラートン作という説もあります。）

2022年2月にウクライナへ侵攻し、今なお戦いを続けているロシアでうまれた曲で、1917年のロシア革命以前まではロシア帝国の国歌として歌われていた曲でしたが、今では平和を祈る賛美の詞がつけられていることは、神の計り知れないご計画をみる思いです。

原歌詞1～3節までの4行目を見ますと英国国教会の聖公会祈祷書からの言葉を引用して、「主よ、私たちの時代に平和を与えてください」と繰り返し嘆願します。しかし、原歌詞4節では、「主よ、『あなたはあなたの時』に平和を与えるでしょう」と変わっています。それらの言葉には、神への信仰と神の主権が強調されています。

争い多きこの時代の中を生きされている私たちは、「平和を与えませ」と、全能でありながらも憐み深く義なる愛の神に祈りつつ、又すべてに「神の時」があることを信じ歩んでいきましょう。

わたしはまた、大群衆の声のようなもの、多くの水のどどろきや、激しい雷のようなものが、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ、全能者であり、わたしたちの神である主が王となられた。」 黙示録19:6

【参考資料】 <https://wordwisehymns.com/2015/11/09/god-the-omnipotent/>

言葉による賛美歌 その歴史と意味

<https://hymnstudiesblog.wordpress.com/2008/06/04/quotgod-the-omnipotentquot/>

Wordwise Hymns ヒムスタディーズブログ

<https://music.churchofscotland.org.uk/hymn/266-god-the-omnipotent-king-who-ordainest>

The church of Scotland